

客家土楼における地域・居住環境の変容：世界遺産登録と人口流動を中心に

劉，秀鳳

九州大学大学院統合新領域学府ユーザー感性学専攻：博士課程修了

坂元，一光

九州大学大学院人間環境学府教育学部門：教授

<https://doi.org/10.15017/7387260>

出版情報：国際教育文化研究. 16, pp.1-13, 2016-09-30. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



客家土楼における地域・居住環境の変容

－世界遺産登録と人口流動を中心に－

劉 秀鳳 坂元 一光

1. はじめに

中国福建省西部に数多く見られる客家土楼は明時代末期（1522-1566 年頃）から 1980 年代まで建設されてきた伝統的な巨大民居（集合住宅）であり、その独特の建築様式から 2008 年には閩南土楼群とともに（後述）福建土楼群として世界遺産にも登録されている。近年の都市部産業の発展によって土楼を擁する山間地域からは人口流出が続いているものの、世界遺産化による就業機会の増大や劣悪な都市生活環境からの転居により土楼に帰る人びともおり、現在でも生きられた伝統住居として利用されている実態が見られる。一方で、観光化をはじめ急激な社会的変化の波を受け、土楼地域や土楼居住の形態はさまざまに変容し、多様化していることも事実である。本研究では現地調査を通して世界遺産登録化による土楼地域の社会変容、生活変容の類型的把握を試みるとともに、土楼地域の人口流動の実態を通して伝統的な集合住宅である客家土楼の居住環境の現状を明らかにする。

本研究では客家土楼地域の全体現状を把握するため、客家土楼が中心的に分布している福建省西部の龍岩市永定県と漳州市南靖県を対象に現地調査¹を行った。具体的な調査地域は以下の通りである（図 1 を参照）。

a) 龍岩市永定県：

下洋鎮「初溪土楼群」（世界遺産登録）

湖坑鎮「洪坑土楼群」（世界遺産登録）

高頭「高北土楼群」（世界遺産登録）

南溪土楼溝の実佳村、新南村（非登録地域）

b) 漳州市南靖県：

書洋鎮「河坑土楼群」（世界遺産登録）

書洋鎮の曲江村、石橋村、南欧村、塔下村（非登録地域）

2. 客家土楼と世界遺産登録：土楼地域の観光化類型

2-1 世界遺産登録と客家土楼群

福建省西部に分布している土楼は福建土楼（英名：Fujian Tulou）という名で 2008 年ユネス

コ世界遺産・文化遺産に登録された。世界遺産に登録された土楼の総数は46座があり、福建省の龍岩市永定県、漳州市南靖県と華安県に分布している（表1を参照）。表1で示された土楼及び地域は、世界遺産に登録されたものである。実は、世界遺産に登録された土楼は土楼全体のうちのわずか一部である。龍岩市と漳州市を中心とする福建省西部には、土楼が数多く存在している²。黄（2009）の統計によれば3733の土楼が存在している。

土楼とは、閩西³と閩南地域で大家族が住み、防衛機能を持たせるために、木材を柱に、土壁で作った多層的で巨大な建物である（黄 2009）。福建土楼は、客家土楼と閩南土楼を合わせた総称である。表1から見ると、世界遺産に登録された永定県と南靖県の土楼は共通の回廊を持った通廊式⁴の客家土楼である。華安県の二宜楼、東陽楼、南陽楼は単元式の閩南土楼である。客家語を使っている客家人が居住している土楼は客家土楼と言われ、閩南語を使っている閩南人が居住している土楼、閩南土楼と分けて呼ばれることが多い。以下では、土楼の世界遺産登録の数の多い客家土楼地域が調査対象として、現在の土楼居住の現状及び変容を把握するために、そのひとつの大きな要因と思われる世界遺産登録と観光化の影響を中心に分析を行った。



図1 調査地である福建省西部の龍岩市永定県と漳州市南靖県の所在位置

表1 世界遺産に登録された土楼および所属地域

類 型	場 所	土楼地域	世界遺産に登録された土楼
客家土楼 (通廊式土楼)	永定県	初溪土楼群	集慶楼、華慶楼、余慶楼、绳慶楼、福慶楼、庚慶楼、锡慶楼、共慶楼、藩慶楼、善慶楼、
		洪坑土楼群	振成楼、福興楼、如昇楼、福裕楼、光裕楼、奎聚楼、慶成楼
		高北土楼群	承啓楼、五雲楼、世澤楼、僑福楼
		南溪地区	衍香楼、振福楼
	南靖県	田螺坑土楼群	步雲楼、和昌楼、振昌楼、瑞雲楼、文昌楼
		河坑土楼群	绳慶楼、東昇楼、晓春楼、南薰楼、永盛楼、永栄楼、永慶楼、朝水楼、永貴楼、春貴楼、陽照楼、裕昌楼、裕興楼
		梅林地区	和貴楼、懷遠楼
閩南土楼 (単元式土楼)	華安県	大地土楼群	二宜楼、東陽楼、南陽楼

（注：UNESCO ホームページ（2014 <http://en.unesco.org/>）に示された土楼名称に基づいて作成）

2-2 世界遺産登録と観光化に基づく類型化

世界遺産に登録されるかどうかは政府からの経済的援助や観光産業の拡大など現地社会に大きな影響を及ぼすと考えられる。そこで本論においては世界遺産への登録と観光地化を軸として客家土楼地域の全体像を典型的に把握することにした。まず「世界遺産登録の有無」⁵と「観光地化の有無」⁶を二つの軸として類型化した。すなわち客家土楼地域を図2のように、(Ⅰ)世界遺産に登録され観光地となった地域；(Ⅱ)世界遺産に登録されながら非観光地の地域；(Ⅲ)非世界遺産であり非観光地の地域；(Ⅳ)非世界遺産であるが観光地となっている地域という四つの類型化を試みた。

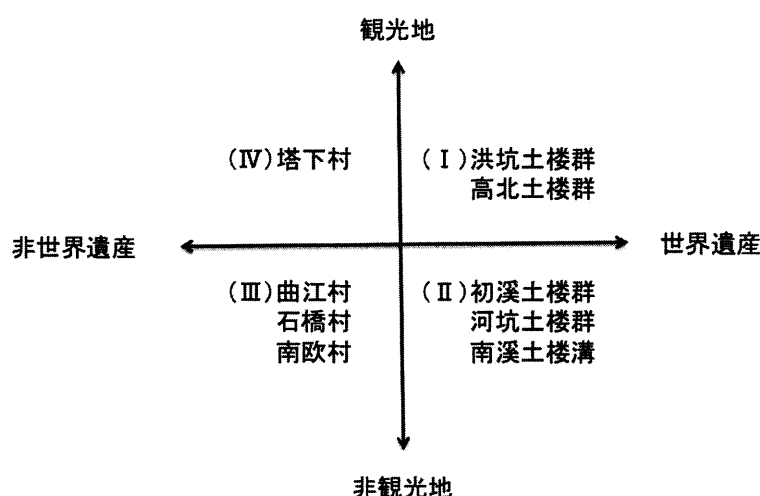


図2 客家土楼地域における世界遺産と観光の類型

(Ⅰ) 世界遺産に登録され観光地となった地域

世界遺産に登録され、観光地になった地域を指す。永定県の「洪坑土楼群」、「高北土楼群」はその好例である。これらの地域は、中国国内や海外の団体観光バスや個人の観光客が多く訪ねる地域である。各土楼群について、観光客の総数に関する具体的な統計数字は見当たらないが、地元の人々の話によると、「洪坑土楼群」では、毎日10台近くの観光バスが来る時もあるとのことである。中国の人民網の報道によれば、永定県における2013年の国内外の総観光客は433万人である（人民網福建頻道：2014/1/5）。観光客は主に団体観光と個人観光があり、団体観光は主に旅行会社が経営し、アモイから日帰りの観光が多い。個人観光は夏・冬休み期間や連休に学生や家族旅行をする人々が多い。また、観光地になっている地域では入場券が必要である。1つの地域の入場券を購入すれば、該当地域のすべての土楼に自由に出入りすることができる。以上の地域を見ると、個別の土楼の歴史や建築構造の特異性により、地域全体が観光地になることが多い。例えば、「洪坑土楼群」の場合は、「土楼王子」と呼ばれる「振成楼」と五鳳楼の「福裕楼」（図3）が最も宣伝されている土楼である。土楼を観光する人々はまず「洪坑土楼群」を見ることが多い。それは、「洪坑土楼群」地域が「土楼民俗文化村」として設置され、永定県政府がよく宣伝する地域であることとも関連している。「高北土楼群」は、土楼の中に4つの「環」をもつ「承啓楼」が特に有名である（図4）。「承啓楼」はその歴史や建築の視点から多く研究された土楼であり、中

国の郵便切手にも載せられたため、よく知られている土楼である。

世界遺産に登録され、観光地になった客家土楼地域（「洪坑土楼群」と「高北土楼群」）には、観光業の発展により現地住民の収入が増加し、就職が増えたため、都市化により都市部へ流出した若者が地元に戻るという「逆流」傾向が見られる。一方、観光化のために一部の土楼（振成楼、福興楼）が土産店やホテルとして改造された例も見られる。また、世界遺産に登録された土楼に対しては旅行管理会社による管理や保護がなされているため、土楼に居住している人々との間で摩擦やトラブルが起こる場合もある。例えば観光ガイドがマイクを持って大きな声で案内するため、本来静かな生活の場である土楼は、公共の場となって、住民の休憩や子育てに大きな騒音と影響を与えている⁷。

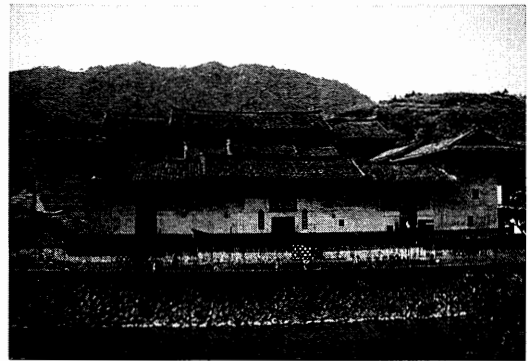


図3 「洪坑土楼群」の振成楼（左）と福裕楼（右）



図4 「高北土楼群」の承啓楼

（Ⅱ）世界遺産に登録されながら非観光地の地域

世界遺産に登録され非観光地である地域は、世界遺産に登録されながら観光地化していない地域のことを指す。永定県の「初溪土楼群」、南溪土楼溝と南靖県の「河坑土楼群」は該当の地域である。これらの地域の概要は以下の通りである。

①「初溪土楼群」は、世界遺産に登録された土楼が10座であり、個性的な土楼建築と歴史のある土楼も多数ある。永定県の下洋鎮に所属し、下洋鎮から約40キロ離れている。舗装道が作られたが、山が多くて、直線の道が少なく、険しい山路である。現在（2014年3月）下洋鎮からのバ

スがないため、住民たちは外出する時に、自家用のバイクを利用する。大型観光バスは険しい山路を通ることが困難であるため、団体観光はほとんど来ない。個人の観光客は、永定県から下洋までバスに乗って、下洋からバイクを頼む方法しかない。交通の不便さがあるため、「初溪土楼群」は今のところ観光地になっていない。

②南溪土楼溝は実佳村、新南村などいくつかの自然村落から形成された地域であり、山と山の間にある溝のような地理構造のため、当地は「南溪土楼溝」と通称されている。南溪土楼溝では衍香楼と振福楼という2座の土楼が世界遺産に登録された。永定県の湖坑鎮から車で20分の距離で、交通が便利のところでもあるが、登録された土楼の数が少ないため、まだ外部の人々に十分知られていない状態である。

③「河坑土楼群」は南靖県の書洋鎮にあり、南靖県からバスで1時間程度、永定県からアモイまでの大きな道が通る地域であり、交通の便からいうと便利な地域といえる。「河坑土楼群」には世界遺産の土楼が13座あり、外観も非常に素晴らしい(図5)。しかし、外部に知られていないため、観光客が訪れない土楼地域である。現地調査によると「河坑土楼群」の住民は、当時世界遺産に登録するため、土楼の近くに造られたコンクリート製の建物を壊した。その代わりに、南靖県政府が住民に賠償金を支払い、「河坑土楼群」から1キロ離れたところに住宅地を立て替える約束をしたが、立て替え住宅地の整備が進んでいない。「河坑土楼群」の住民は南靖県政府に対して不満がありデモも行われた。賠償金を貰った一部の住民の中には、自分の村に土地がないため、隣の曲江村に土地を買って新しい家を造る人もいる。また、旅行管理会社は、現在住民たちの菜園を観光のために花壇として整備をしようとしているが、住民全員の意見をまとめることができず工事が進められない。以上の様々な理由で、政府側は積極的に「河坑土楼群」を宣伝してない。結果的に「河坑土楼群」は世界遺産に登録されても、観光からの影響がなく、静かな生活が維持されている。



図5 河坑土楼群

(Ⅲ) 非世界遺産であり非観光地の地域

非世界遺産であり非観光地の地域は、世界遺産に登録されず観光地にもなっていない土楼地域のことを指す。客家土楼地域においては、基本的に世界遺産に登録されていない自然村落は観光

地になっていない。南靖県の書洋鎮に属している石橋村、南欧村、曲江村もその例である。以下、石橋村、南欧村の例を紹介する。

「石橋村」は「河坑土楼群」から3キロ程離れている。石橋村の土楼は河に沿って立てられたものが多く、建築学者にも注目されている（図6）。茂木計一郎（1991）を中心とした東京芸術大学中国住居研究グループも調査しており、客家土楼の中でも規模が一番大きい土楼「順裕楼」（土楼の直径⁸74.1m）の所在地である。しかし、一般の人に知られていないため、観光客は一切来ない。当地の住民はアモイなど都市部への出稼ぎやお茶の植栽と加工を主な生業としている。

「南欧村」は書洋鎮から車で30分程度の伝統的な土楼村落である。大きな土楼が点在しながら、現代的なコンクリート2、3階立ての建築が併存している。「大夫第」という「科挙」に受かった人物にちなんで造られた土楼1座と、他に規模の大きい円楼、方楼が多数ある。労働層は都市部へ流出したため、寂れた印象の村落である。近くにお茶の工場と生物栽培研究所があるため、広いコンクリート道があり、交通は便利であるが、観光地ではない。

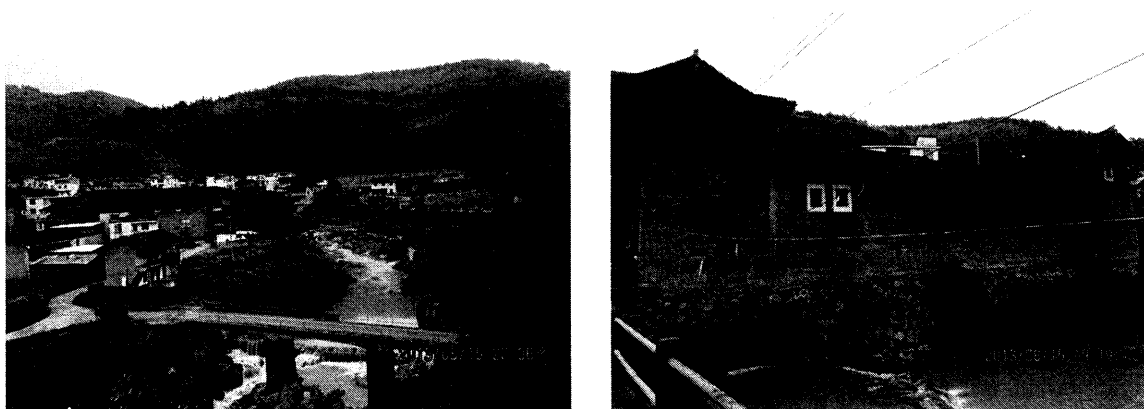


図6 石橋村の外観及び河沿いの長源楼

（Ⅳ）非世界遺産であるが観光地となっている地域

この地域は、世界遺産に登録されていないが、実質的に観光地になっている土楼地域を指す。世界遺産に登録されていない地域は、観光地になることが一般的に難しいのであるが、南靖県書洋鎮の塔下村は例外である。

塔下村は書洋鎮から車で40分、「河坑土楼群」から15分のところにある。村の真ん中に河があり、河の両側に土楼が造られている（図7）。また、「田螺坑土楼群」に行く際に、この村の中を通らないと行けないという交通上の構造もある。塔下村の祠堂は清代に造られ、その他清代の遺跡が多く存在していることで、福建省の文化財に登録されている。また、塔下村出身の人々は、シンガポールなど東南アジアからの華僑が多く、中国国内や海外で活躍する人が多い。その有志たちが地元の建設と観光開発に力を入れているということで人々によく知られた地域である。この地域は塔下村の祠堂を積極的に宣伝することで観光地化がすすんでいる。塔下村では、観光客向けのカフェ店や旅館、レストラン、土産店などが多数存在している。

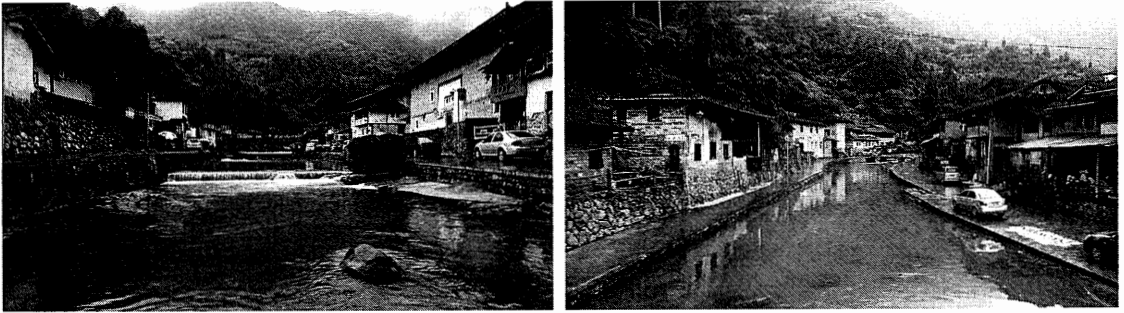


図7 塔下村における河沿いの外観

3. 客家土楼をめぐる人口流動:都市化と観光化による土楼住民の動き

現在客家土楼を取り巻く環境は都市化、観光化により様々な変化を受けている。中国改革開放（1978）以後、中国全体で都市化が進み、農村地域の人々が都市部へと押し寄せた。都市化は中国全体の発展の証でもあり、客家土楼地域も同様の流れの中にある。特に1990年代から福建省のアモイや広東省の深圳、広州へビジネスや出稼ぎをする若年層世代が増えてきた。彼らは現在も都市部で活躍している。一方、2008年の客家土楼の世界遺産の登録に伴い、客家土楼地域は観光地となり大きな変化が起った。土楼地域では観光化による就業機会の増大によって、都市部へ流出した人々が地元に戻る傾向が見られる。また劣悪な都市環境での生活や子育てを嫌って土楼へ戻る人々も存在する。

客家土楼地域には、都市化による都市部への流出の動きと、観光化や伝統的、自然的生活を求めている土楼への回帰という、相反する二方向の人々の動きが存在している。観光化によって、都市部へ流出した人々が農村地域の土楼へ戻るという現象は都市化に伴う人口移動に対する「逆流」現象と言えよう。そしてこの「逆流」現象には主に3つの形態が見出される。即ち、1) 定年後の「帰楼」、2) 子どもと祖父母の土楼への回帰と 3) 子育て世代の都市部からの土楼への「逆流」である。また、その要因としては観光化による経済要因と生活要因があると考えられる。このような客家土楼地域における人口流動の現状は図8のように示すことができる（図8を参照）。

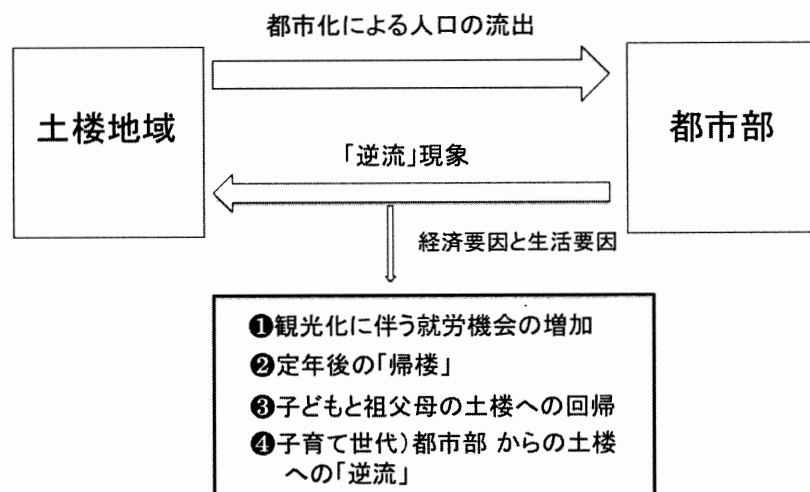


図8 客家土楼における人口流動の現状

1) 定年後の「帰楼」

都市化により都市部へ流出した人々の中には、都市部で就職し、定年になってから生まれ育ちの土楼地域に戻るという「帰楼」の人々が存在している。その人たちの間には、元の土楼に戻って、住居をリフォームして住むとか土楼の近くに新たな家を建て住むなど居住形態の多様化が見られる。彼らへのインタビュー⁹から定年後土楼に戻った理由として以下の3つほどが挙げられる。

①土楼の室内温度が適度であること

土楼の室内温度は一年中 30℃¹⁰を超えることなく、暑い夏の夜でも掛け布団が必要なほどである。山地環境における昼と夜の大きな温度差に対し、土で造られた土楼は、温度の調節ができる機能を果たしているようだ。「冬暖夏涼」の土楼は、適度な気温が保たれ、住みやすい。

②空気がきれいであること

工業が発展している都市部における大気汚染が大きな環境問題になっているのに対し、工業のない山地環境と人口低密度の土楼地域では、空気が良いことは確かである。

③健康的な生活ができること

土楼では、自分で野菜や果物、お茶などを作って、年取った人にとって、適度な運動になる一方、無農薬の食品は体にいいという認識が高まりつつある現在は、健康な晩年の生活を土楼で送りたいと考える人が増えてきた。(ただし、年寄りにとって、近くに病院やクリニックがないという不便もある。)

2) 子どもと祖父母の土楼への回帰

仕事の関係で都市部へ出稼ぎした若者の間では、住宅の問題や年取った両親の都市環境への不適応などから、土楼に帰りたいと希望する人も増えている。また、中国の戸籍制度により、都市部で子どもの教育が制限されることや、共働きにより子育ての手伝いが必要な現実があるため、子どもと祖父母だけが土楼へ戻るケースも多い。その結果、子どもが親と離れて祖父母と近隣のネットワークの中で育てられる。('河坑土楼群'ではこのようなケースは十数世帯見られた(2014年3月現在))。一方、観光化による就職口の増加によって、子育て世代の親が子どもと祖父母が土楼に居住している土楼へ戻って一緒に住むようになるケースもある。

3) 子育て世代の都市部からの土楼への「逆流」

家族全体生活の質を求める人々が増え、土楼の子育てしやすさを理由に、子育て世代を中心に都市部から土楼へ戻る場合がある。土楼へ戻ってきた子育て世代に聞き取り調査¹¹を行ったところ、水、空気の汚染、住空間の狭さ、不安な人間関係などにより子育てがしにくい都市部に対し、客家土楼は自然が豊かで、安心できる子育て環境の存在が魅力であると語った。

以上を整理すると都市部へ流出した人々が土楼へ戻る「逆流」現象が生じる理由としては、以下の経済要因と生活要因があると思われる。

①経済要因としては、客家土楼地域の観光資源化による就職機会の増加である。地元で就職が提供されるため、かつて都市部へ流出した若年労働層が土楼へ戻る大きな要因となる。客家土楼における人々の動きの引き金は就職の機会と収入の機会にあると考えられる。

②生活要因としては、都市部における居住環境の悪化と土楼の住みやすさである。急激な経済発展により中国の都市部では空気、水、居住環境などが悪化しつつある。人々の都市部から土楼地

域への「逆流」現象からは、土楼の好ましい居住環境要因を見出すことができる。都市部へ流出した人々のうち、定年後の高齢者や子育て世代の若年層たちは、生活の総合的な質を重視する観点から、都市部より土楼の暮らしを評価し土楼に戻ることが明らかとなった。

4. 現代における土楼との共存（改造）

伝統的な集合住宅（住まい）としての土楼は、インフラ整備や間取り、雇用機会など必ずしも現代人の生活に適した住居とはいえない。土楼に住み続けている人々や土楼に戻って新たな生活を確立しようとしている人々は、この古い住居とどのように折り合って住まっているのか、以下ではいわば時代遅れの建築物である土楼と人々の共存の実態を見てみたい。その具体的な適応の戦略の明らかにすることを通して、現代においても生きられた集合住宅として活用されている客家土楼の姿を浮かび上がらせてみたい。なお世界遺産保護のため、当地の住民は保護範囲内において無許可で土楼の改造をしたり、無断で新しい建物を建設したりすることができない。共存実態の把握に関しては、世界遺産登録を受けている地域と受けていない地域に分けて述べる。

1) 制限がある地域の場合

世界遺産に登録された土楼及びその周辺は、明確な保護地域となり、無許可での改造と新しく建築をすることができない。具体的には永定県の「洪坑土楼群」、「高北土楼群」、「初溪土楼群」、南溪土楼溝の一部と南靖県の「河坑土楼群」などの地域がそれに相当する。これらの地域では以下の3つの形式を見出すことができる。

①継続的な土楼居住

制限がある地域では、新築や土楼の改造が出来ない事情があり、古いままの土楼に引き続き居住することになる。その場合、若者や若夫婦は仕事のため都市部へ移住することが多く、定年後の年寄りと子どもが土楼に残されるケースもある。また、家族人数の増加で土楼の生活空間が狭くなる問題も大きい。

②土楼と現代建築の共存利用

家族の増加により居住空間が足りないため、土楼の近くに造られた建物（世界遺産に登録される以前に造った）を居間・食堂として利用し、土楼は寝室だけに利用する場合もある。居住空間の確保のため現代の建築を利用しながら土楼を活用する居住形式が見られる。

③新たな建築様式の居住

観光地になった土楼地域は、自分たちの土楼を土産店や旅館として観光用に活用することが多い。その場合、家族の住居は土楼地域から離れたところ（政府が提供する土地や自分が購入した土地）に現代コンクリート建築に住むという形をとる。このように、土楼は商売と一族の集会の場となり、日常生活とはほとんど切り離される場合がある。

2) 制限がない地域の場合

世界遺産に登録されていない地域では、基本的に土地・建物の使用权は当地の住民に属する。現代の生活ニーズに合うように土楼を改造したり、土楼に直接新たな現代の建物を建てたりする例が見られる。

①土楼内部のリフォーム（実佳村を例として（2013年8月）；図9を参照）

伝統的な客家土楼では一階は厨房・食堂という構造になっている。土楼の一階に白いペンキを塗り、ソファやお茶セットなどを置いて明るい居間としてリフォームしたり、空き部屋を麻雀など娯楽の場所として改造することがある。空き部屋はダイニングルームや接客室として利用される。中庭にある石で造られた小屋は厨房や食堂、沐浴室として利用されている場合もある。

②土楼に接した住宅空間の拡大（実佳村と石橋村を例として（2013年8月）；図10を参照）

家族の増加により、居住空間が足りないため、土楼を延長するという改造が見られる。それは、土楼の外周に、コンクリート製の建物を築き、本来の土楼と連続的に利用できるような住み方である。

③土楼の周りにコンクリート戸建ての建設（南溪土楼溝の新南村を例として（2013年8月）；図11を参照）

土地の余裕がある場合は、土楼と無関係に独立した戸建てを建てることが多い。新しい建築様式やリフォームの個性化により、土楼地域全体のイメージを壊す問題があるが、現実の生活空間の確保も大事であることが分かる。

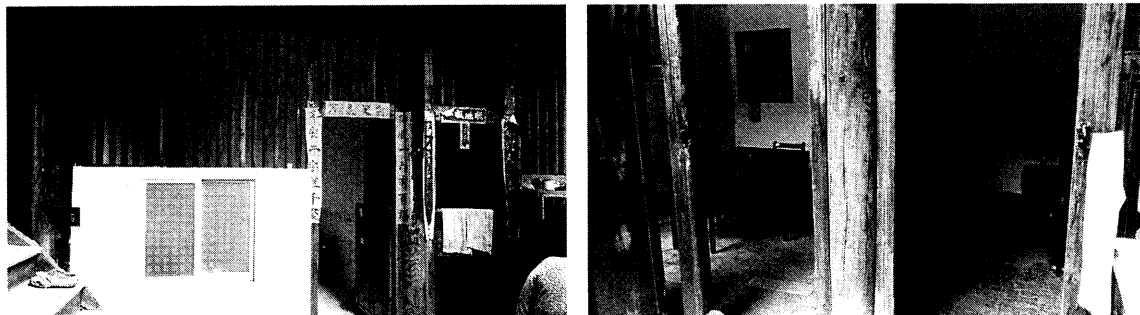


図9 一階の厨房にガラス窓を付け（左）や麻雀室（右）としてリフォーム（実佳村）



図10 土楼に接し家族空間を拡大する様式（石橋村と実佳村）

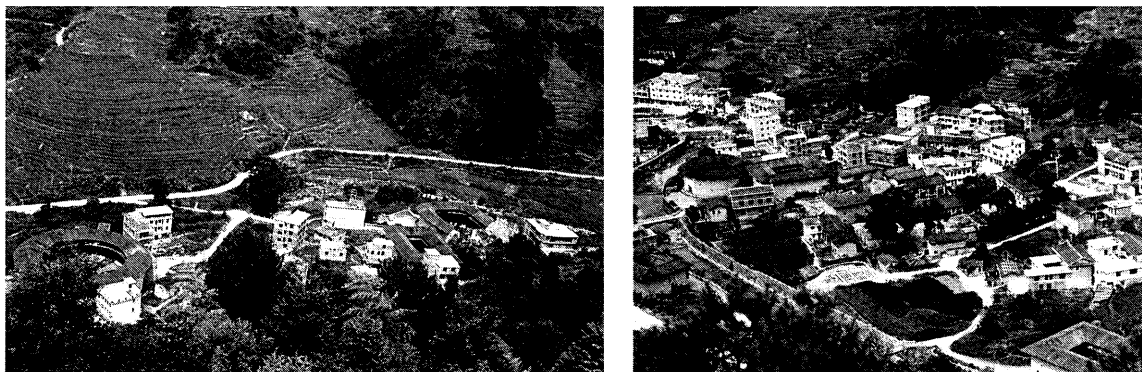


図 11 土楼の外部に新たなコンクリート製住宅を建てる様式（南溪土楼溝）

5. おわりに

本論では、客家土楼の住民の生活の現状を、客家土楼が中心的に分布している福建省龍岩市永定県と漳州市南靖県を中心に明らかにした。急激な都市化という中国社会全体を巻き込んだ激流の中に置かれている客家土楼地域の変化の現状を、世界遺産登録による観光化要因と厳しい都市生活を逃れての帰楼という二つの大きな要因に絞って述べてみた。

現地調査から、客家土楼地域では、住民たちは伝統的な居住様式を保持しながらも多様な居住生活を展開していることが分かった。本論ではまず、観光化と世界遺産の影響に基づいて土楼地域を、①世界遺産に登録され観光地となる地域、②世界遺産に登録されながら非観光地の地域、③非世界遺産であり非観光地の地域、④非世界遺産であるが観光地となっている地域という4つのゾーンに分けて、客家土楼地域及び住民生活の実態と多様性を明らかにした。

また、客家土楼地域では都市部から土楼へ戻る「逆流」現象という興味深い人々の動きを見ることができた。そこには土楼の観光資源化によって地元で就職口が確保されたため若手労働層が再び客家土楼へ戻る流れが見られた。また都市における居住環境の悪化と土楼の住みやすさの再認識により定年後の中高年世代や子育て世代が土楼へ戻って居住する現象も見られた。そして土楼に住もう人々の間には現代的な生活様式に合わせ、快適性を求めて土楼を改造、改修する様子も見られた。客家土楼に実際に居住する人の数は基本的に減少しているが、本論で示した土楼へ向かう人口流動存在やリフォームなど適応的居住戦略の実態から、客家土楼が今を生きるローカルな集合住宅として存続している姿を明らかにすることができたと考える。

注：

- ¹ 本調査は3回に分けて実施した。具体的な調査期間と調査内容は以下の通りである。
 - 1) 2010年3月1日から12日まで、共著者の坂元との共同予備調査として、客家人の集中的な居住地廣東省梅州市にある中国客家博物館や資料館及び客家人の伝統的な集合住宅-囲龍屋を訪問した後、福建省龍岩市永定県にある洪坑土楼群と初溪土楼群において土楼生活の現状を観察した。
 - 2) 2013年8月2日から29日まで、福建省龍岩市永定県の「洪坑土楼群」、「初溪土楼群」、南溪土楼溝、「高北土楼群」と漳州市南靖県にある「河坑土楼群」及び周辺の石橋村、南欧村、塔下村などの土楼村落において土楼建築と土楼生活の現状を考察し、住民たちへの聞き取り調査を実施した。
 - 3) 2014年2月25日から3月21日まで、「河坑土楼群」、塔下村について二回目の調査を行った。冬の土楼の生活について観察し、聞き取り調査をおこなった。
- ² 筆者が永定県と南靖県において山間部の村落（南欧村、石橋村、塔下村）を調査した時にも、上記の三つの村全体は現代のコンクリート戸建て建築以外はすべて土楼建築であった。現地住民からの聞き取り調査からこれらの地域は、中国の改革開放（1978）以前はすべて土楼居住であった。
- ³ 閩は福建省の簡称である。閩西は福建省西部を指し、閩南は福建省南部を指す。
- ⁴ 黄（2009）は階段と廊下の共有の仕方によって土楼を「内通廊式」と「单元式」に分けた。「内通廊式」は土楼内に共有の階段と回廊を持ち、それによって各家庭はつながれている。「内通廊式」土楼には主に客家人が居住している。「单元式」は、共通の回廊と階段がなく、各家庭内に階段を設けているものである。「单元式」土楼には主に閩南人が居住している。
- ⁵ 世界遺産に登録されたかどうかで「世界遺産」と「非世界遺産」とに類型化した。
- ⁶ 観光客が多く訪ねる現状があるかどうかを基準に「観光地」と「非観光地」の類型で示す。
- ⁷ 2013年8月に振成楼に在住している20代男性1名と40代女性2名へのインタビューした内容に基づいた。
- ⁸ この数字は黄（2009）の調査資料から引用した。
- ⁹ 南溪土楼溝にある実佳村在住の60代男性3人、女性2人（2013/8/13）及び「河坑土楼群」在住の60代夫婦（2014/2/29）を対象としてインタビューを行った。
- ¹⁰ この数字は実測値ではなく、インタビューによる土楼住民の実感（言葉）である。
- ¹¹ 「洪坑土楼群」の朝陽楼に在住している30代女性2人（2013/8/13）と「河坑土楼群」に在住している20代女性3人（2014/2/28）を対象として聞き取り調査を実施した。

参考文献：

1. UNESCO(2014.11) <http://en.unesco.org/>
2. 黄漢民 2009 『福建土楼—中国伝統民居の瑰宝』、生活・読書・新知三聯書店
3. 人民网(2014年1月5日) <http://fj.people.com.cn/n/2014/0105/c181466-20307107.html>、
4. 茂木計一郎、稲次敏郎、片山和俊編 1991 『中国民居の空間を探索：群居類住“光・水・土”中国東南部の住空間』、建築資料研究社
5. 羅香林 1992 [1933] 『客家研究導論』、上海文藝出版社影印本
6. 謝重光 2008 『客家文化述論』、中国社会科学出版社
7. 劉秀鳳 2013 多様な人に育まれる子どもの住空間、こども環境学研究 Vol. 9, No. 3 (C. N. 26) pp44-45

The Transformation of Regional and Residential Environment in Hakka Tulou – Focusing on World Heritage Registration and The Movement of Population –

Xiufeng LIU Ikko SAKAMOTO

In this research, we elucidated that the actual situation of regional and residential environment in Hakka Tulou area through the world heritage registration and the movement of population. From the fieldwork, we found Hakka Tulou's inhabitants taking a variety of lifestyles under the influence of tourism and the world heritage registration. There are four zones of actual situation in Hakka Tulou area. a) The zone which registered in the world heritage and became as tourist attraction; b) The zone which registered in the world heritage but for non-tourist attraction; c) The zone of non-world heritage registration and non-tourist attraction; d) The zone of non-world heritage registration but for tourist attraction. In addition, the inhabitants returning from urban area were able to see in Hakka Tulou area. There are two reasons: one is the employment opportunities were increased by tourism ; the other is the deterioration of residential environment in the urban area and good for living at Tulou were re-recognized. Besides that, we can also see that lots of remodeling and refurbishment at Tulou for fitting the modern lifestyle. From this research, we can see Hakka Tulou are the popular collective housings from former times up to the present.